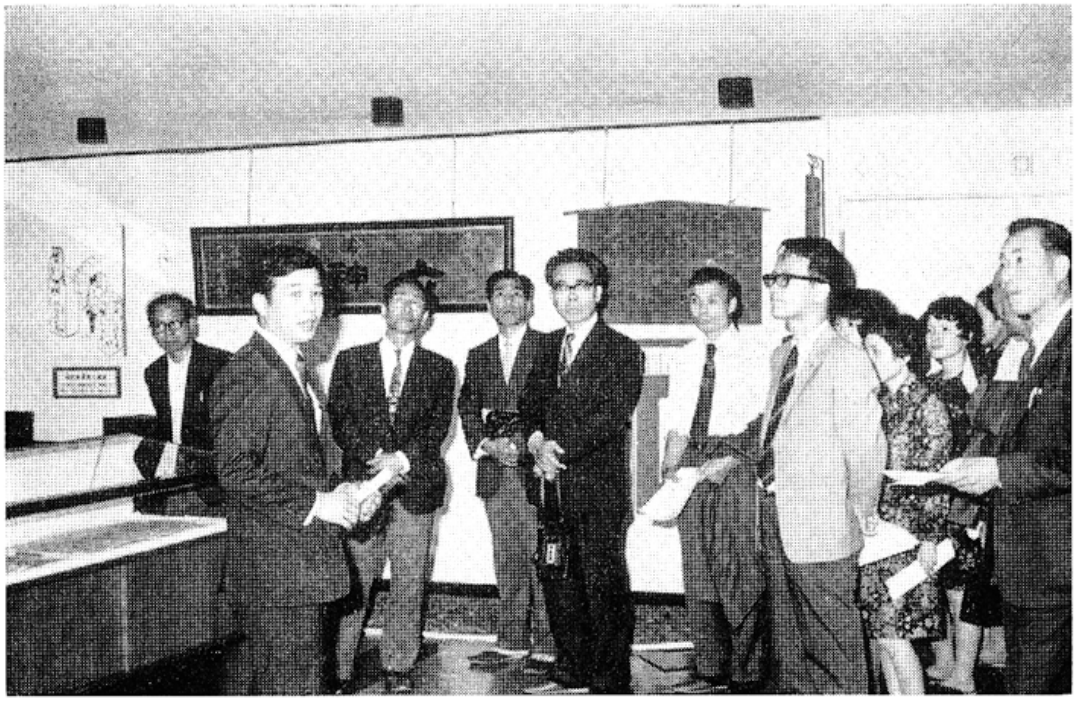
48.6.23

愛知の博物館

1973年　No. 19



愛知県博物館協会

目　　次

「第２０回全国博物館大会」に参加して　永田計夫 …… 1

愛知県博物館協会、岐阜県博物館協会合同学芸員研修会に参加して　三戸幸久 …… 2

東三河の文化財探勝会について（報告）　荻野　正 …… 4

愛知県博物館協会第２回研修会報告　福山寿麿 …… 7

霧社事件と高砂族　金子　功 …… 9

昭和４７年度事業報告 …… 11

昭和４７年度決算書 …… 12

昭和４８年度事業計画（案） …… 13

昭和４８年度予算（案） …… 14

「第２０回全国博物館大会」に参加して

永　田　計　夫

「第２０回全国博物館大会」は、初秋の気ただよう北海道の地で３日間（９月１９日－２１日）にわたり開催された。大会の共通テーマは、「現代、将来を考え人類に奉仕する博物館の役割」である。

私は愛知県博物館協会の事務局担当の一員として、各地の博物館人の生の声をきくことのできるこの大会に大きな期待をもって参加した。大会初日にあたる９月１９日は、この地域も台風のあおりを受けていたため、参加者の多くが非常に難渋して会場までたどりついたようであるが、私は運よくほぼ予定通りの時間に到着でき、幸先のよいスタートであった。

大会初日、まず北海道博物館協会犬飼会長の開会の辞、日本博物館協会徳川会長の挨拶等開会式に引続き全体会議が開かれた。全体会議では、日博協星野常務理事の経過報告、文部省沢田社会教育課長の博物館行政の現況説明に引続き博物館に対する国庫補助金の増額要望等が論議された。次いで記念講演に移り、高倉北海道大学名誉教授から「北海道の開拓史」と題して開拓の意味、北海道開拓の特殊性、開拓にまつわるエピソード等内容豊富なまた興味深い話を拝聴した。

午後からのシンポジュームは、「博物館の文化的教育的役割」をテーマとして新井埼玉大学教授、毛利科学技術館次長、庭瀬北海道立教育研究所社会教育研究部長、吉崎北海道大学助教授を講師として開催された。庭瀬講師からは、利用されない博物館の問題をとらえ、一般的に博物館のイメージが古い、これには博物館のＰＲが非常に不足している、利用者の必要を満し、利用に価する博物館が少ない、他方学校教育中心で社会に出てからの学習方法が利用者としても身についていないといった趣旨の意見が述べられた。吉崎講師は個性的な博物館が少い、博物館は高度に発達したデータバンクとしての機能をもち、データサービスをふんだんに行なえるような体制を持つべきだ、広域博物館と地域博物館との間で相互に協力体制をつくり調整をはかるべきだ、博物館と大学間で相互利用の関係を強化する必要があるが、それには学芸員のレベルアップをはからねばならない等のことを豊富な例を引用して話された。次に毛利講師からは余暇の増大、教育の機械化、公害問題、産業構造の変化等生活活動、思想が多様化するなかで今後多種多様な博物館が生れてくると思われるが、これからの博物館はかような情勢の変化に対応して閉鎖的な世界にとどまらず広い意味の博物館としての機能を充実しなければならないと将来展望を含めていろいろ指摘された。最後に新居講師からは、博物館の文化的、教育的役割、学校教育と博物館の連携、自然と文化財保護、展示の構造化といった事柄を述べられた。

全体を通じてテーマにそくし講師それぞれの立場から博物館人として考慮すべき重要事項が数多く述べられ、限られた時間のなかでの討議としては成功であったと思われる。私個人としては、吉崎講師のデータサービスを行なえるような体制をもった博物館といった発言に博物館のもつサービス機能について目下関心をもっているのでもっとも興味をひかれた。

大会２日目は現地ゼミナールの開催、４コースに分れバスで各地の施設等を見学した。私は第４コースの美術系に参加した。参加者は約４０名、最初に北大農学部付属植物園、

博物館を見学した。あいにくの雨にたたられ傘を連ねながら博物館、バチェラー記念館そして自然林へと１００年前の北海道の姿を偲びながら園内を一周し、ここからバスに乗車して重要文化財豊平館と八窓庵を見学、次に羊が遊ぶ平原、羊が丘展望台へ。羊が丘は、植物園の自然林とともに北海道の自然をもつとも強く感じさせるところである。このあと開拓１００年を記念して建設され、諸施設も充実している開拓記念館を見学、開拓記念館は、施設の面もさることながら運営の姿勢も積極的であって地域の博物館として大きな役割を果すものと考えられる。

最後に道立美術館に立寄り、石橋館長、武田学芸員から設立の由来、所蔵品、事業内容の説明を受けた後、大小４つの展示室を見学。この美術館には、北海道出身の故三岸好太郎氏の遺作２２０点のほか地元出身作家の作品が収蔵されている。施設面ではスペースが狭隘であるので移設計画を進めているとのことである。以上で現地ゼミナールは終了、何といっても百聞は一見にしかずである。

翌日は、午前中分科会、午後全体会議のスケジュール、いよいよ最終日である。

分科会は４つに分れており、私は「博物館の情報管理とサービス」をテーマとする第１分科会に出席した。第１分科会は毛利科学技術館次長を座長に、仙台市博物館の浜田学芸員から「博物館における情報サービスの現状と問題点」、北海道開拓記念館の森田学芸員から「北海道開拓記念館の情報管理業務について」それぞれ発表を受け、これをもとに検討を加えた。発表内容および検討の結果を、要約すると、博物館相互の情報交換は、地域的に広域にわたり行なう必要がある。その方法としては日博協などが中心となり情報を管理し、各館がこれを使うというのが理想的であるが、一度にそこまでは無理であるので、手始めに地方別、専門別の集いで情報の交換を行ないリーダーとなるような館を育てていくことが望ましい、といったようなことになろう。

午後は、各分科会からの報告と大会決議のとりまとめのため全体会議を行ない、続いて閉会式を挙行。これで大会の全日程はとどこおりなく終了した。大会の準備から閉会まで、事務局はじめ関係者のご苦労は並大底のことではなかったろうと思う。

今回の大会をふりかえってみると、テーマにそくし博物館の当面する諸問題の検討や、よりよい博物館にするための提言、問題提起等、限られた時間のなかで活発に行なわれ、相応の成果を収めたものと考える。私自身、啓発される点が多かったし、また各地の博物館人との面識を深められたのは何よりのプラスであったと思われる。

<愛知県文化会館企画課長>

愛知県博物館協会・岐阜県博物館協会合同学芸員研修会に参加して

三　戸　幸　久

岐阜県博物館協会と愛知県博物館協会の合同集会は、１０月１１日午前１０時から内藤記念くすり資料館で開かれ、博物館の研究発表から始まった。研究発表後討議の中で私が特に興味を持ったことは発表の内容とは直接には関係のない話題でした。

それは岐阜県博物館協会からの参加者から出された「弱小博物館はどうしたら生き抜く

ことができるか」という話題です。すなわち地方の郷土博物館とか私立の小さな単科博物館や路傍博物館がかかえている「運営資金がほとんど無い状態で、どうしたら良い博物館にしていくことができるのか」「入場料をどれくらいにしたらよいか」「宣伝の方法は」「展示の方法はどうか」「来館者が少い」などの問題です。これらの問題に対して参加されていた豊橋向山天文台の金子功先生や日本モンキーセンターの広瀬鎮先生の経験などから次のような意見が出されました。（要約）「小さな地方の博物館は展示に出す資料を、狭いにもかかわらずこれでもかとばかり全部陳列する傾向があるのではないでしょうか。そうすると解説も充分できず薄っぺらなものになってしまいます。これではだれしもが『もう一度来てみたいな』という気がおこらないでしょう。そうなれば見学者は帰ってからもいい宣伝をしてくれない。見学者が少くなるのは当然です。その地方でしか見ることができないものや、その地方の特色あるものなどを、テーマを作り、テーマに沿って一部分ずつ展示しわかりやすい解説をつける。それを年2～4回ぐらいの展示替えをすればけっこう楽しめるものになると思います。又、同じ地方の内の小さな博物館が協力し合えば、お互いの館の展示が重複することもないと思います。それから小中学校との連絡、協力も必要でしょう。そういう活動の中で「解説」もよりわかりやすく深いものになるし、教育効果も上がってくると思います。もちろん評判もよくなるし利用者も多くなってくるでしょう。」これで本質的問題が解決するとは思えませんが、少くとも「弱小博物館が当面している大きな壁の一端をくずしていくことができるのではないかと思いました。

昼食後、内藤記念くすり資料館を現地研修として見学が行なわれました。館は薬の会社エーザイの広大な工場敷地内に薬草園に接して建てられています。館の外観は合掌造りのような建物で展示室は2階から5階までで上に行くにしたがって展示室のスペースは狭くなっていきます。どうしてこういう作り方になったのかは聞かずじまいでしたが「博物館としてはあまり機能的ではない」との話でした。最上階にはエーザイの宣伝展示があり、それは何かピラミッドの底辺部に博物館があり、その頂点にエーザイが「君臨」しているかのように思えました。

見学後、意見の交換が設備のよくととのった階段状の視聴覚室で行なわれ、その中で参加者の一人から次のような発言がありました。「くすり資料館の展示は薬を作ったり売ったりする薬を提供する側からの展示内容だが、薬を利用する側の立場に立った展示内容もあればいいと思います。」私も大切なことだと思いました。例えば民衆は種々の薬をどれくらい価値のあるものとして利用していたか、

迷信も含めて民衆が感じたもっと広い意味での「薬」が理解できればよかったと思いました。この問いはまた、博物館の性格を表わす大切な問題ではないでしょうか。「だれによるだれのための博物館か」それを私は機会あるごとに考え、討議していくことが必要ではないでしょうか。

最後に館長宵木先生を始め係員の方々の用意万端ととのえられた御高配に心から感激し、御礼申し上げるしだいです。

（日本モンキーセンター附属博物館学芸員）

東三河の文化財探勝会（報告）

荻　野　　正

愛知県博物館主催の東三河の文化財探勝会が11月26日行なわれましたので、概要を報告します。（参加者　三河地方小中学校教諭はじめ43名　貸切バス利用）

(1)　豊川三明寺

三明寺は曹洞宗に属し、大宝2年文部天皇が行幸のとき境内のほとりで、弁財天の霊験を得られ大和国橘覚淵阿闍梨に命じて堂塔を建てた。平安朝の頃三河の国司大江定基公が、愛人力寿姫の死を悲しみ、世の無常を感じ出家し名を寂照と改め、力寿姫の面影を永久に残したいと、弁財天の像を刻み三明寺に納めたのが、ただいまの本尊で等身大の裸像で12単重の衣裳を召されて、己年毎に衣裳替えをし開帳する慣しになっている。

鎌倉時代の三明寺住職が鎌倉幕府の命に従わなかったため、源範頼に攻められ堂塔をことごとく焼失したが、室町時代に遠州半僧坊開山となられた、無文元選禅師（御醍醐天皇、皇子）が再建したもので、今の塔はその当時のもので、明治45年5月に重要文化財に指定された。

高さ18m余の三重の塔はその様式には特徴があり、初層二層は和様、三層は唐様である点は、日本にも例がなく、室町時代の建築物としては著名である。また弁財天の宮殿は天文23年の再建で、昭和28年国指定の重要文化財に指定された。

馬方弁財天について、つぎのような伝説が伝えられております。昔鎌倉時代の話であるが、心の正直な馬子が前の鎌倉街道を通る度に、神前にお参りして追分けを歌っていきました。その美しい歌声に弁財天様が聞きほれて、ごほうびをいたゞいた。財布のお金をいら使っても、決して減らずに財布に残るという、不思議な小判を下さった。それからその馬子は何不自由なく、暮すことができたという伝説が今でもいい伝えられておるといわれております。

(2)　大原薬業資料館

新城市の中心地にある大原薬業資料館は館長大原紋三郎個人の設立で、昭和43年10月開館した。設立の趣旨は新城市に郷土資料館がない、市の現状から実現の見通しは暗いので、私は独力で開設したわけで、他日市立博物館の出来るのを夢みて、それまでは独立でこの資料館の運営をしているとのことでした。

この資料館は宝歴5年（1755年）県下では屈指の老舗で大原紋三郎家に伝来した、薬業資料946点の展示ではじまり、展示室は木造二階建延坪100㎡で、収蔵品は薬業資料1100点、民俗資料300点、郷土文書200点、特色としては県下唯一でも珍らしい存在で注目されている。

展示室にあるものはどれを見ても珍らしく初めて見るものばかりで、薬を造る道具、薬を測る秤や容器、薬袋など薬に関する一切の資料が狭い展示室に一ぱい、さては古い薬業書籍、古い薬屋の看板が数１０枚、実に美事これだけよく保存したと感銘の言葉が出ない程沢山あるのに驚いた。また珍らしい火打石堤灯、珍らしい郷土文書などや民俗資料も沢山展示してある。百聞は一見にしかずの諺があるように、是非一度見学してほしいと思いました。

(3) 設楽原決戦場

これは長篠合戦に関係があるが、三河東御駅の西にある、決戦場は織田徳川の連合軍と武田勝頼の大軍が決戦となった設楽原決戦場を車窓より見学した、詳しいことはつぎの項で詳明します。

(4) 長篠城趾

長篠城趾は豊川と宇連川の合流点で、長篠の戦という、歴史上有名な戦の中心地ばかりでなく、当時山の城から平地の城に発展していく過程のもので、高く評価されている。

昭和４年１２月７日、国の指定文化財になった、長篠城は１５８０年（永正５年）今川方の菅沼元成が築城したもので、豊川宇連川を自然の壕として、城の西北は密林や竹やぶで当時としては、相当堅固のものであったといわれていた。

菅沼元成から五代は武田氏に属し、1537年（天正１年）には徳川氏の領有となった。武田氏にそむいて徳川と結んだ、当時２１才の奥平貞昌は城主に登用された。

父武田信玄の志をついだ勝頼は１５７７年（天正３年）５月１万５千の大軍を率いて、長篠城を囲みはげしく攻撃した。

奥平貞昌は城兵５００で鉄砲でよく防いだが、食糧が欠乏したので、忠臣鳥居勝商は厳重な囲を破って、岡崎に走り、織田徳川の援

軍３万８千は設楽原で、三重柵を結い、３千丁の鉄砲を三段に構え撃った。騎馬戦を得意とする武田軍の騎馬隊も、織田徳川の連合軍の鉄砲隊の新兵器の前にもろくも敗れ、主だった武将はここで戦死し、武田勢は急に衰え、織田徳川の勢は強くなった。

長篠城趾史跡保存館には２００余点の史料を分りやすく展示してあり、武田信玄から織田信長まで、戦乱にあけ暮れた日本の激動期の約１０年の歴史の流れが詳しく展示してあります。

丸山館長さんから、当時のことに詳しく説明がありましたが、書き尽せませんので省略します。

(5) 馬の背岩

国道１５１号線より鳳来寺山パークウイ取付橋の湯谷大橋より見えるのが、湯谷温泉でその手前の河床の中心線に沿って、安山岩脈が露出して、この岩脈の周囲の凝灰岩より堅いので、水の浸食に対する抵抗力が強くて、馬の背すじの形に河床に残ったもので、昭和９年５月１日天然記念物に指定されました。

この馬の背より見える一帯が湯谷温泉で、ラジウム温泉で古くから親しまれ、渓谷美と相まつて多くの観光客をひきつけております。

湯谷温泉を起点として、鳳来寺山パークウエイが、昭和４６年８月開通した、有料道路で工費１２億９千万円、延長7.7Kあり、それまでは表参道の1,４２５段の階段を登らなくてはならなかったのが、僅か１５分で登れるようになりましたが、環境保護が叫ばれている現在この自然破壊について強い批判が集中したことも注目されています。

(6) 鳳来寺山

鳳来寺山は海抜６８４mで名勝天然記念物に、昭和６年７月３１日国の指定文化財となっております。

鳳来寺山は約２千万年前はげしい火山活動によって噴きだしたもので、硫紋岩、松脂岩、凝灰岩、石英安山岩などでできており、長い間の風化浸蝕作用によって、今のような険しい山の形になったのです。

鳳来寺山の有名なブッポウソウは、愛知県の鳥として指定されており、その鳴き声が仏法僧と仏教の三宝に似ていることから、霊鳥として珍重がられ、５月から８月にかけて鳴きます。

鳳来寺は真言宗五智教団の本山、大宝２年文武天皇の勅命により、利修仙人が建てたもので、本尊は薬師如来が祠られております。

(7) 鳳来寺山の東照宮

この東照宮は日光久能山と並んで、三東照宮の一つで、徳川家康公因りの最も深い三河にあるということでなくて、徳川三代家光公が、日光縁起を見て天文１１年(１５４２年)広忠卿が世嗣を得たいと、子宝に恵まれない伝通院於大の方が、鳳来寺薬師如来に祈願されて、授けられたのが後の徳川家康公といわれており、家康公が戦国時代を鎮めて、この鳳来寺東照宮の建設を計画された。

四代将軍家綱公がこれを受け継いで、慶安４年９月１７日東照宮を完成し、それ以後徳川幕布の直営で大修理が行なわれたが、明治以後は地元崇敬者の手で経営維持されている。

昭和２８年１１月４日本殿、中門、幣殿、拝殿、水屋、透塀の六棟が文部省の重要文化財に指定されております。

パークウエイの開通により、四季を通じ鳳来寺山を訪ねる行楽客で賑いを呈しております。

(8) 鳳来寺山自然科学博物館

時間的余裕がなく、見学できなかったので概要を説明します。当館は昭和３８年４月２５日開館、地元資産家丸山喜兵衛氏の私財千数百万円の寄付を受け、県補助金町費など約3,２９０万で建設したもので、鳳来寺山を中心とした、地質動植物を展示してあり、特色としては日本でも珍らしい、二重展示方式を採用しております。

一階は生態展示として系統的に、だれでも分るように展示してあり、二階は専門的に分類展示として、研究や鑑定するために展示してあります。

保管資料も約６千点を保管または展示しており、本年は植物保管庫を建設し、植物標本約４万点の寄贈が申出られており、一層内容の充実が期待されており、年間約６万人の入館者があります。

一度是非ご見学をお願したい、また有名なブッポウソウの鳴き声も聞かれるよう設備してありますので、美しい鳴き声もきいてください。

以上簡単ですが文化財巡りの報告とさしていたゞきます。

<担当館、鳳来寺山自然科学博物館勤務>

愛知県博物館協会第２回研修会報告

福　山　寿　麿

熱田神宮宝物館では、奈良国立博物館から蔵田蔵館長、東京国立博物館から荒川浩和漆工室長を招いて、「正倉院御物模造特別展」の特別講演が開かれた。これを機会に愛知県博物館協会でも、両先生を囲んで学芸員研修会を開催したが、各館より多数の学芸員や博物館関係者が出席し、まことに盛況な研修会であった。

幸に、蔵田先生より奈良国立博物館本館（この度竣工した新館）の施設を紹介いただき、荒川先生からは、科学力、機械力を駆使した施設の中での学芸員の心構えや反省というべきものを、日頃の経験を交えて拝聴することができた。

ときに、巷の美術関係の雑誌は、パリに５０億の建築費をかけた日本文化会館設立の動きがあると伝え、また、ルソーの「熱帯」を１日本人が６億円の巨額で入札したと報じて、将来、日本は世界一の美術国、芸術国と浮き立つニュースに思い合わせると、両先生は日本の美術界の行先を憂えての問題提起と考えるのは私一人の思い過ごしであろうか。

ここにその概略を記して報告方々皆様の参考としたい。たゞ、紙数の関係で意の通じぬ点、また私なりの曲解は悪しからずお許しをいただきたい。

（蔵田館長講話概略）

奈良国立博物館の新館建設は、前石田館長の時既に芸大の吉村順三教授が参画し、地上三階・地下一階で高い塔のあるユニークな建物が計画されたが、名勝奈良公園・風致地区などの理由で賛成が得られなかったもので、今回は平らな建物ということで新しく計画を進めた。しかし、建設地には春日大社の東・西両塔の礎石と古都保存法の制約によって、

止むなく地上二階・地下一階という窮屈な建物になった。更に改築ではなく増築となると大変難かしい問題もあったが、やっと建設省の許可を得たものである。博物館はその時代のモニュメントになるものであるから、最高の建築をということで約７億円を予算化したが、人件費、材料費の高騰で大変苦しい建築費であった。

新館は一階が1,６２０㎡、二階が1,８１６㎡、中二階が７５４㎡、地階は1,５３５㎡で、外観は高床式で正倉院風でもあり、新宮殿にも似ている。地階から二階床面までが鉄筋コンクリート造り、二階は鉄筋軽量コンクリート造りで屋根はハの字形で棟にあたるところが平らかで自然光を受け入れるよう配慮されている。一階はピロティで、周囲をすべてガラス張りにし、建物を通して奈良公園や庭の景観が楽しめる。一階中央には、二階陳列室に昇る斜路と講堂、休憩室が設けられている。狭小な建物の中で最も場所をとった斜路には種々意見も出たが、吉村先生もこの点は譲られなかったところで、美術品を障害なく搬入出するために敷居や階段をなくして造ったもので新館の特徴の一つでもある。講堂は一階と地階の中間に位置し、一階より階段を５・６段降りた処に客席を設け、１２０名分の移

動椅子を備える。演壇後方はピロティ同様に壁がなく、必要な時には黒板・映写幕は追出し、講堂全体はアコーディオン式の板で外部と遮断できる。後部に35㎜スタンダード映写機2台を備えている。二階には陳列室、収蔵庫、調査室、写真室があり、斜路を昇った両側が陳列室である。収蔵庫は二階と中二階に分かれ、コンクリートの上に床はベニヤ張り、壁、収納棚はスポルターという脂のでない外国檜材を用いている。写場は一番大きい掛軸である神護寺の両界曼荼羅が掛けられ、場内は劇場風に二階造りで二階からも写真撮影が可能なよう工夫をこらしている。博物館で一番大事な所は陳列室であるが、私共の館では、彫刻室、絵画室という風に部屋を分けることができず、釈迦関係室、密教関係室とか教義本意に区分するため、そこには彫刻、絵画、工芸品、経巻、兎角関係あるものは同じ部屋、同じケースで展観する。従ってケースは大きく作られ、ガラス戸は動力で開閉できるようにしている。また正倉院展を行なう関係から特に温・湿度、盗難には十二分の配慮をしている。地階は荷解室、殺菌室、空調、電気関係室などがある。そのほか、冷凍機は音の関係で外庭に防音壁を設けて設置し、エレベーターは建物の外観上から油圧式エレベーターを使用している。また放送設備、列品解説用オーディオ・ガイドの設備もとゝのえている。

（荒川漆工室長講話概略）

蔵田館長から新館の施設や設備につき、非常に詳しく貴重なお話しを伺い、まことに羨ましく思った次第です。博物館や陳列館を建てることは、我々が日頃やらねばならないことや、やりたいことなどの総合力が全部結集されてできるわけです。

ところで、博物館が行なっている保存と陳列は、極端にいうと完全に相矛盾することをしているわけで、これが理想的に行なえるなどとは正直いってあり得ないわけです。しかし、この矛盾を補う方法も次から次へと考え出され、ことに機械力や科学の力の利用は目覚しいものがあります。これと同時に人的な力、体でなければできないものもあります。今日ここでは、そのうちの最も原始的（敢えて原始的と申上げたい）な面だけを強調して話してみたいと存じます。

私が担当する漆には、木工品、竹製品が多く、これは美術品の中でも非常に敏感で弱く、取扱者にとって神経質になりがちのものです。外国のキュレターのように物を論じ、考え、書くという方向の人が今は多くなっているけれど、これが良い悪いという意味でなく、その場だけでトックリ返しヒックリ返し眺めて頭で考えるより、品物に普段から接して観察し、その特徴や癖を肌で知り、愛情をもって扱うことが第一です。従って温・湿度の問題でも機械を使用して人為的に調節して一定に保てばよいが、それが故障で停止した時を考えると非常に恐ろしいわけです。またコンクリートの建築物は、それ自体から出る害を遮断したり調節したりする意味で、内張りには木材を使用するが、これを合板などでおぎなうと、接着剤を使用している合板の化学的作用も含めて考えるとき、非常に不安が大きいわけです。これは一例であって、今の科学による新しい知恵と、機械による新しい設備で解消できるではあろうけれど、人間の知恵と経験で、生きものが生きていく最底限に必要な、最も原始的な方法をも同時に考え合わせるべきである。また、別の問題では、工芸関係の古い職人さんたちが嘆くことは、労働基準法のためでもあるけれども、今の人は物の製作途中でも時間がくれば仕事を打ち切り、次の日再び同じ準備や作業を繰返し始めるなど、作業によっては非常に無駄と不合理を重ねることが多いという。しかもそれ以上に、将来、昭和の時代の品物のでき上りを考えるとき、何と恐ろしく、また何と悲しむべきことであろうか。そういう意味で、我々が文化

財を護っている立場から、また物を作っている人の立場から、我々が理想とするところより別の方向に向っているのではなかろうか。科学の世の中で、我々が忘れかけているもの、失なつたもの、それは、「我々の先祖がごく普通にやつてきたものごと」なのである。この我々の祖先の歩んだ道を伝えることができず、我々の中から消えていくということを、一人でも多くの人に考え、反省していただくことが私の願いであります。

<熱田神宮宝物館宝物係長>

霧社事件と高砂族

金子　功

霧社事件というのを覚えている方もありましょう。42年前つまり昭和のはじめに台湾中部の山地霧社という高砂族の村で、差別待遇に反発した高砂族の人達が、日本人皆殺しを計った事件である。

当時の日本では、単なる山地民族の反乱事件という事で始末されているが、話に聞いてみると仲々興味深い話があった。

日本統治時代の台湾の教育制度はどうなっていたかといえば、日本人の子供は小学校という内地と同様な制度の下で教育を受けていたが、台湾人は公学校という特別な学校で教育を受け、上級学校に進学するにも例えば台北市にあった台北一中は日本人の子供だけで台湾人は二中でなければ入れなかったという。

ところが高砂族の子供は教育所という所で教育を受けさせられ、台湾人以下の取扱だったという。

然しこうした差別を受けた高砂族の人達の中にも優秀な人物はいたわけで、この霧社事件の中心人物だった日本名を花岡一郎という人もこの優秀な高砂族の一人でした。

霧社のあたりの高砂族といえば、タイヤル系のセデック族といわれる部族で、近くにある蕃社マヘボ社の出身で現地名をモーナダオといっていたそうです。

彼はこんな差別を受けている高砂族の出身でありながら台北の師範学校まで出る事が出来、霧社の学校の正教員をして勤めていたというから相当優秀な青年だったらしい。

優秀であればある程腰のサーベルをガチャつかせて権力を笠に着てる警察官を中心とする日本人の横暴振りは腹にすえかねるものがあっただろう。

台湾が日本領土になったからといって日本人としての義務だけを課して権利をいえなかった総督府の考え方に反撥した彼は、附近の蕃所の高砂族を指導して一年余りの間に綿密な計画をめぐらし同志を集め武器を作り機会を待った。

毎年秋になると学校の運動会が開かれるので、霧社に在住する日本人のすべてが集って来るという機会を利用して日本人を皆殺しにしようと考えたわけである。

一年間に亘る永い準備期間中に此の計画が外部に漏れなかったという事は彼の指導力もさる事ながら高砂族の人達の反日感情も相当根深いものがあって、この団結があったと思われます。

いよいよその機会がやって参りました。年に一度の学校の運動会は楽しみの少い日本人にとっては何よりのレクリエーションであった事でしょう。時間が来ていよいよ国旗掲揚となり君が代のラッパを合図にかねての計画通り手に手に手製の武器を持った高砂族の人達が立上り、集った日本人227名中143

名がその場で殺され重軽傷多数を出し彼等の計画は一応成功しました。

霧社には軍隊はいないので、からくも助かった日本人の一人が２３㎞程離れた麓の埔里までたどりつき駐在所に急を訴えた。

日本側は直ちに鎮圧というより報復のため警官と軍隊合せて3,０００人からの部隊を出動させたが、何分にも埔里、霧社の間の山道は片側は深い谷、そして反対側は高い山といった地形で、今でも一車線半位の道が出来ているだけで、当時は人一人が歩いて通るのがやっとの道のことととていかに多数の部隊を繰出してみてもとうていゲリラのように山の上にこもる高砂族相手では手の付けようがなく、最後には飛行機を繰出して毒ガスまで使って一週間後に鎮圧しました。この時の高砂族の死者は約９００人といわれます。

ところで主謀者の花岡一郎はどうなったかというと事件後当局の厳重な調査でも死亡した事は判っているが、遂にその死体は発見されなかったらしいが、彼には当時身重の奥さんがあり事件の前日離れた山中の蕃社の実家へ帰されているので無事に事件後も日を送り、今は台湾省議会議員高永清氏夫人として霧社の近くにある温泉で旅館を経営され、事件当時お腹にあった花岡一郎の子供さんも今は立派に成長して省政府の役人として勤務しているそうである。

霧社の町を訪ねて見ると４０年前のこの事件も、今は霧社青年活動センターの横に鳥居形の霧社義起戦没者記念碑というのが民国４２年４月に立てられているだけで、遠い昔のような気がする程村は観光客で賑っており、当時の抗日の気分は全然感じられません。

村の中心にある教会の隣の家には日本人の婦人が台湾人と結婚して平和に暮しているそうで、現在の高砂の人達は非常に親日的で彼等同志の間では今でも日常会話に日本語を使っているという程の人達の中で、どうしてこんな事件が起きたのか一寸想像する事が困難な位いです。

（豊橋向山天文台台長）

昭和４７年度事業報告

1. 研修会の実施

イ　日　時　　昭和４７年１０月１１日

会　場　　内藤記念くすり資料館（岐阜県羽島郡）

学芸職員研究発表、調査紹介及び討議

(1)　台湾国立博物館の展示をめぐって

豊橋向山天文台台長　　金子　功

(2)　ソビエト宗教博物館を巡る焼身自殺、民族自決論

濃飛甲冑研究所学芸員　　吉田幸平

(3)　教育活動

市立名古屋科学館学芸員　三輪　克

参加者　　１５館　　２２名（岐博協と共同）

ロ　日　時　　昭和４８年１月１３日

会　場　　熱田神宮宮庁会議室

講　演

(1)　奈良国立博物館新館について

奈良国立博物館館長　　蔵田　蔵

(2)　美術品の保存と陳列について

東京国立博物館漆工室長　荒川浩和

特別講演（一般聴講者と一緒に聴講）

(1)　正倉院宝物の工芸技術

東京国立博物館漆工室長　荒川浩和

(2)　正倉院の歴史と宝物

奈良国立博物館館長　　蔵田　蔵

参加者　　８館　　１６名

2. 印刷物の配布

イ　壁新聞の配布

県下の小・中・高校に配布

ロ　機関誌の発行

「東西南北」№５６～６７　　「愛知の博物館」№１９

ハ　「愛知の博物館」（ガイドブック）増刷

3. 「文化財探勝の会」実施

日　時　　昭和４７年１１月２６日

探勝経路　　(1)豊川市　三明寺ー(2)新城市　大原薬業資料館ー(3)鳳来町　鳳来町立長篠城趾史跡保存館ー(4)鳳来町　馬の背岩ー(5)鳳来町　鳳来寺山東照宮

参加者　　三河地方小・中学校教諭外　　４３名

4. その他

総　会　　昭和４７年５月２４日

理事会　　昭和４７年５月２４日、７月１４日

昭和47年度決算書

愛知県博物館協会

収入の部

費目	当初予算額	補正額	現計予算額	決算額	差引過不足	摘要
	円	円	円	円	円	
会費	41,000	1,000	42,000	42,000	0	29館
県費助成金	300,000	0	300,000	300,000	0	
加盟館負担金	90,000	△ 2,000	88,000	88,100	100	
参加者負担金	26,000	△14,000	12,000	11,800	△200	研修会 200円×8名 文化財探勝会 300円×34名
雑収入	1,500	23,622	25,122	25,140	18	預金利子1,540円 「愛知の博物館」236冊分
繰越金	9,378	0	9,378	9,378	0	前年度からの繰越金
計	467,878	8,622	476,500	476,418	△ 82	

支出の部

費目	当初予算額	補正額	現計予算額	決算額	差引残額	摘要
	円	円	円	円	円	
研修会費	15,000	△10,000	5,000	4,000	1,000	2回
印刷製本費	202,000	~~141,000~~ 139,000	341,000	340,900	100	壁新聞（博物館要図）「東西南北」1656～1667 「愛知の博物館」1619 「愛知の博物館」（ガイドブック）
「文化財探勝会」費	56,000	△ 6,000	50,000	45,800	4,200	
講演会費	100,000	△100,000	0	0	0	
会議費	36,900	△ 6,900	30,000	27,220	2,780	総会 1回 理事会 2回
事務費	34,000	6,500	40,500	39,520	980	郵送料、旅費等
負担金	10,000	0	10,000	10,000	0	東海博負担金
予備費	13,978	△13,978	0	0	0	
計	467,878	8,622	476,500	467,440	9,060	

差引残額 ~~11,978~~ 8,978円は48年度へ繰越

昭和48年度事業計画（案）

1. 研修会の実施　　年2回

　博物館関係施設に勤務する職員を対象に行なう研修

2. 印刷物の配布

イ　機関誌の発行

　「東西南北」　月1回

　「愛知の博物館」　年1回

ロ　PR用印刷物の作成

3. 「文化財探勝の会」実施　年1回

　教職員を対象にし、県の文化財めぐりを行なう。

4. その他

　総会を年1回、理事会を年2回程度行なう。

昭和４８年度予算（案）

収入の部

費目	予算額	摘要
	円	
会費	４０,０００	２９館４０口　2,０００円×１１館　1,０００円×１８館
県費助成金	３００,０００	
加盟館負担金	８７,０００	3,０００円×２９館
参加者負担金	２４,０００	研修会２００円×１０名×２回 文化財探勝会５００円×４０名
雑収入	１０,０１２	預金利子等
繰越金	8,９７８	
計	４７０,０００	

支出の部

費目	予算額	摘要
	円	
研修会費	１６,０００	講師謝金5,０００円×２回、食糧費３００円×１０名×2回
印刷製本費	２９６,４００	「東西南北」1,２００円×１２回 「愛知の博物館」１２,０００円 ＰＲ用印刷物２７０,０００円
「文化財探勝会」費	７０,０００	借料５０,０００円、食糧費３００円×５０名 その他雑費5,０００円
会議費	３０,９００	総会費５００円×２５名、理事会費５００円×１０名×2回 理事会出席者旅費4,２００円×２回
事務費	３４,０００	消耗品費5,０００円、通信費２０円×３０×１５回 旅費２０,０００円
負担金	１０,０００	東海博負担金
予備費	１２,７００	
計	４７０,０００	

各費目は流用することができる。

編　集　後　記

今年度は事業計画案のうち、総会決定により講演会をとりやめた外は、研修会2回、印刷物の作成配布、文化財探勝会等を、それぞれ理事会で定めた担当館のお骨折りにより実施いたしました。研修会は初めて岐阜県博物館協会と共同で行なう機会を得、また昨年度作成した「愛知の博物館」（ガイドブック）も好評で3,000部の増刷をするなど、多大の成果をあげました。

来年度も皆さま方のご協力により事業をすすめていきますので、よろしくお願いいたします。

（愛知県博物館協会事務局）

「愛知の博物館」　№19

発行日　1973年3月

発行者　愛知県博物館協会

名古屋市東区久屋町8－8

愛知県文化会館内（電052－971－5511）

編集者　愛知県博物館協会事務局